正確に音読したり,朗読したりする能力を高める指導

足利市立御厨小学校国語研究部

1. 主題設定の理由

昭和５４年度に研究した学び方を取り入れた学習過程にそって、国語科の指導を展開するなかでいくつかの問題点に気づいた。その１つが、児童の音読・朗読の能力が伸びなやんでいるということである。

声が小さくて、ひびきが悪い。口の開き方が正しくない。一語一語しっかり読まない。読みちがいや読みおとしが目立つ。句読点や間のとり方、息つぎがよくできない。読みに変化がなく一本調子であるなど、発音や発声法、表出法などに関する多くの問題があるように思われる。

このように、音読、朗読の能力が身につかないのは、読解指導の中で、音読活動は取り入れてはいるものの、それぞれの学習過程において、音読・朗読の指導の観点やねらいを明確にしないままで指導にあたっていたことに原因があるように考えられる。

そこで、学び方の学習過程の中に、音読と朗読を確実に位置づけ、音読や朗読の技能に関する学習の手引きを作成し、指導を強化したいと考えた。また、児童にも、音読・朗読の意義を理解させ正確に音読したり、朗読したりする能力を高める指導を試みたいと考え、この主題を設定した。

2. 主題に対する基本的な考え方

新学習指導要領では、音読を、理解力をつけるための重要な基礎的事項として取り上げている。つまり、声を出して文章を読むということは、文章を理解する方法を身につけさせる基本的な能力と言えよう。また、音読することによって、文章の内容を正確に、あるいは、深く理解し、感動を声に出して表すことによって、深い読みに発展していくものである。

一方、朗読は、表現力をつけるための重要な基礎的事項として取り上げられている。朗読は、音読指導を基盤にして営まれる表現活動である。つまり音読の深化したものと考える。また、表現活動としての朗読は、読み手が文章なり作品なりを正しく理解し、場面の情景や人物の心情を深く理解して行われるものであり、理解と表現が一体化されたとき、朗読という表現活動が成立すると考える。

本研究は、このような音読・朗読の考え方を土台にして進めてきた。まず、指導要領の指導事項を分析し、音読・朗読の学年別指導の観点を設定し、それらを昨年度作り上げた本校の学び方を取り入れた学習過程の５つの段階に位置づけることを試みた。また、音読・朗読の基礎的技能を身につけさせるために「音読・朗読指導の手びき」を作成し、基礎訓練から指導にあたった。また、児童たちの、音読・朗読に対する興味・関心を高める指導の手だても、取り入れてみた。

3. 研究の計画と経過

月　日	研　究　内　容	研究の場
5月30日	・本年度の研究計画をたてる	国語部会
6月12日	・昭和54年度の研究概要の説明	現職教育
	・実践発表（見通しをたてる学習、確かめる学習、練習学習）	（全職員）
6月17日	・研究授業　第2学年　「かえるのくらし」　（酒井）	現職教育
	第3学年　「ありの行列」　（和田）	（全職員）
	第6学年　「田中正造」　（刑部）	
7月～8月	・音読・朗読に関する文献研究	個人研究
9月29日	・音読・朗読の指導について研究内容の分担	国語部会
10月　7日	・研究内容の検討（音読・朗読の学習過程への位置づけ）	〃
10月17日	・教材研究・指導案の検討	低中高ブロック
10月28日	・研究授業　第1学年　「くじらぐも」　（金塚）	現職教育
	第4学年　「小さい青い馬」　（金子）	（全職員）
	第5学年　「三人の旅人」　（八木沢）	
11月	・実践記録をまとめる	国語部
1月～2月	・研究のまとめをする	〃
3月	・朗読会をひらく。	学年別に

4. 研究の内容

(1) 音読・朗読の指導事項の分析

学年	指導事項	関連する言語事項	指導書による解説
一年	理解 ア．はっきりした発音で、音読すること。	ア．幼児音を使わないで、はっきりした発音で話すこと。 イ．はっきりした発音をするために姿勢口形などに注意すること。	音読系列の中で最も基礎的な事項である。拾い読みでなく、一語一語、一文一文又は文章を明確な発音で読ませることである。この事項は、意味内容を理解することよりむしろ正しい発音で読むことに指導の重点がおかれる事項であるので、発音しにくい音や語句は取り立てて指導する必要がある。 また、この事項の発展として、微音読から黙読に慣れる指導もする。
二年	ア．文章の内容を考えながら音読する。	ア．発音に注意してはっきり話すこと。 イ．はっきりした発音をするために姿勢	ただ、明瞭な発音で音読させるだけでなく、まず、どんなことが書かれてあるかの理解に基づいて、言葉の意味や様子を思いうかべながら、音読させることである。

		口形などに注意すること。	
三年	ア．文章の内容が表われるように工夫して音読すること。	ア．なまりや癖を直すようにして話すこと。 イ．その場の状況に応じて適切な大きさの声と速さを考えて話すこと。	言葉の意味や、説明されている事柄及び場面の様子などをよく理解し、どう音読したら、そうした内容を表すことができるかを工夫させることが大切である。
四年	ア．事柄の意味、場面の様子、人物の気持ちの変化などが、聞き手によく伝わるように音読すること。	ア．なまりや癖のない正しい発音で話すこと。 イ．目的に応じた適切な音量や速さで話すこと。	特に「聞き手によく伝わるように音読する」ということで、表現に傾斜をかけた指導も必要になる。そして、この系列の事項は、第5学年からは「朗読」として「A表現」の領域に移されている。
五年	表現 ケ．他人に伝えるために朗読すること。	ア．正しい発音で話すこと。 イ．言葉の抑揚、強弱などに注意して話すこと。	音読に関する事項は、第4学年までは「理解」の領域に位置付けられ、第5学年からは「表現」の領域に位置づけられている。つまり、読み取った内容に、自分なりに理解したことを加えて聞き手に伝えたり、表現したりするということである。
六年	ケ．聞き手にも内容がよく味わえるように朗読すること。	ア．正しい発音で話すこと。 イ．言葉の抑揚、強弱などに注意して話すこと。	自分が読み味わうために朗読するとともに、聞き手にもその内容が十分味わえることができるようにする。単に他人に伝えるために朗読するだけではなく「内容がよく味わえるように」朗読することである。そのためには、文章の深い理解がその支えになることを忘れてはならない。 更に、留意すべきことは、この事項が、第5、6学年については「表現」の領域に位置づけられたことである。その背景には、朗読を理解のための一手段にとどめず、表現そのものとして位置づけているわけである。理解から朗読へのみでなく、朗読を通して理解へ迫るといった構想の中で、この事をとらえることが必要である。 また、朗読することは、言わば「理解」と「表現」の機能が一体となって働く活動でもある。

(2) 音読・朗読の学年別指導の観点

学習指導要領や指導書から指導事項をおさえ、本校児童の実態を考え、学年別指導の観点を設定した。

学年	学年別指導の観点	学年	学年別指導の観点
一年	1.相手を意識して読む。 2.ひろい読みでなく一語一語はっきりした発音で読む。 3.大きく口をあいて正しい口形で発音する。 4.句読点、意味の切れ目に注意して音読する。 5.呼吸を整えてよくひびく声で音読する。 6.背すじをのばして正しい姿勢で読む。	二年	1.相手を意識し、声の適量を知る。 2.はっきりした発音をするために正しい姿勢で読む。 3.口形を正しくしてはっきり発音する。 4.文節ごとに区切るのでなく、意味のまとまりごとに区切って読む。 5.正しいアクセントで読む。
三年	1.発音のなまりや癖を直す。 2.句読点の意味を考えて区切って音読する。 3.聞き手に内容が理解されやすいような速さで音読する。 4.必要に応じて、声を大きくしたり小さくしたり声の大きさを考えて音読する。 5.意味の切れめを正しくおさえて音読する。 6.会話文は、人物の気持ちになって音読する。 7.場面の様子や人物の気持ちの変化を考えながら音読する。 8.要点をおさえながら音読する。	四年	1.なまりや癖のない正しい発音で音読する。 2.ことばの区切りを考えて、正しい発音で音読する。 3.いろいろな符号(—、……)の意味を考えて音読する。 4.間を考えて音読する。 5.速さを考えて音読する。 6.会話はその人の気持ちを理解して音読する。 7.事柄の意味をよく理解して音読する。 8.場面の様子や人物の気持ちを心に思い描きながら音読する。
五年	1.相手にわかるように正しい発音をする。 2.地の文、会話文などによって、調子やリズムを変えて読む。 3.細かな表現にも気を配ばりながら、抑揚・強弱を考えて読む。 4.聞き手に、心情、情景、すぐれた描写が伝わるように心をこめて読む。 5.相手、時、場所など目的に応じたいろいろな文章を読むことができる。	六年	1.相手に分かるように正しい発音をする。 2.読む目的や文章の内容によって読む速さ、抑揚、強弱を考えて読む。 3.ことばの使い方の巧みさ、表現のすぐれたところを味わいながら読む。 4.聞き手に内容がよく伝わるように間、強弱緩急をくふうしながら読む。 5.目的、場に応じた読み方をくふうする。文章の種類、対象、人員、マイクロフォンの使用など。

(3) 音読・朗読の学習過程への位置づけ

昭和５４年度に、学び方を取り入れた学習過程を設定した。その学習過程の見通しをたてる学習・調べる確かめる学習・練習学習・ひろげる学習・評価のそれぞれの段階に、音読・朗読の観点を位置づけた。

第１学年　物語文　　・指導の観点　　◦留意点

過程	学習活動	形態	音読・朗読の指導の観点、留意点
見通しをたてる学習	1. 自分の力で全文を読み通す。 ◦読めない字、わからない語句をみつける。 （読めない字には側線を引く、わからない語句には波線を引く。） 2. 読めない字やわからない語句を調べる。 （教師の範読や代表児童の指名読で調べる。） 3. 物語の場面やあらすじをつかむ。 （文番号や、場面の番号をつける。） 4. 第一次感想を書く。 5. 読みのめあてをたてる。 6. 学習問題をつくる。	微音読 音読	・ひろい読みでなく一語一語はっきりした発音で読む。 ・句読点や意味の切れ目に注意して読む。 ◦文字の読み違いやとばし読みなど読みの基礎的能力を指導する。 ◦発音しにくい語句は取り立てて指導する。 ◦拾い読みや幼児音を使う児童の個別指導をする。
調べる・確かめる学習	7. 学習問題を調べる。 ・いつ、だれが、どこで、どうしたか。 ・場面の様子を想像する。 ・登場人物の行動や気持ちを想像する。 8. 調べたことを確かめる。 9. 教師の助言、指示を受ける。 10. 第二次感想を書く。	黙読 音読 黙読	・大きく口をあいて正しい口形で正しい姿勢で読む。 ◦言葉や意味がわかるように読む。 ◦読み取ったことに、気持ちをこめて音読する。
練習学習	11. 文字、語句の練習をする。 短文作り、ことばあつめ、筆順 12. 好きな場面、心に強く感じた文を視写する。 13. 音読する。	音読	・相手を意識して読む。 ・呼吸を整えてよくひびく声で読む。 ◦みんなに聞える声で読む。
ひろげる学習	14. 他の作品を読む。 自分の読んだ作品の好きなところを発表する。	音読	・正しい姿勢で読む。 ◦好きなところを音読する。
評価	15. 学習の反省をする。	音読	◦音読のテスト（発音・口形等）

(4) 音読・朗読の指導の手びき

音読・朗読の基礎的技能を身につけさせるために、基礎練習を１５のステップにまとめて、指導の手びきを作成した。

ステップ１　腹式呼吸の練習
ステップ２　呼吸調節練習
ステップ３　母音転換練習
ステップ４　舌の動きの練習
ステップ５　アイウエオの練習
ステップ６　口の体そうA
ステップ７　口の体そうB
ステップ８　早口ことば
ステップ９　鼻濁音の練習
ステップ10　アクセントの練習
ステップ11　使い方によって変わるアクセント
ステップ12　抑揚とイントネーション
ステップ13　間のとり方
ステップ14　緩　急
ステップ15　音読・朗読記号

＜ステップ６　口の体そう　A　＞　の例

ねらい　1. 発声や口型に注意して、五十音のいろいろな組み合わせを正しく発音できるようにする。

2. 正確な発音やアクセントに耳が慣れるようにする。

内　容

内　　容	指導上の留意点
ア　ア　アイウエ　イアウエオ 青空　あおあお　家の上。 えんがわ　えをかく　いい天気。 カ　カ　カキクケ　キカクケコ かきねの　こぎくは　白ぎく　黄ぎく。 北風　からっ風　よけて　ふけ。 サ　サ　サシスセ　シサスセソ ささやぶ　サラサラ　朝日がさせば すずめが　チュンチュン　すから出る。 タ　タ　タチツテ　チタツテト タントン　おとうと　かたたたき。 わたしは　手つだい　だいどころ。	◦国語教材カセット２年（光村図書）を活用する。 ◦カセットを１連ごとに止めて、児童に反復させる。 ◦リズミカルな調子にながされると、音が不正確になるので、それぞれの音を正しい口形で発音させるようにする。 ◦発音、発声、アクセントなどに注意して聞き、反復させるときは、声を張り上げないようにさせる。 ◦濁音、半濁音の行は児童に、ことばを、考えさせ、自作の口の体操を作る。 ◦幼児音やなまりは、特に気をつけて直させる。

(5) 音読・朗読に対する興味・関心を高める指導の手だて

音読・朗読に対する興味・関心を高めるために、音読の家庭学習、音読カードによる練習、朝会後の全校基礎練習、学級・学年朗読会など、いろいろな指導を試みた。

① 音読の家庭学習

毎日、家族に音読して聞かせたり、読んだ文章のページに父母のサインをもらったりする。

② 音読カードによる練習

学年に応じて、音読カードを作り、練習の記録をとる。

＜1年の音読カード＞

大きいこえで　はっきり　よみましょう。
よんだら　はんを　おしてもらいましょう。

おむすびころりん	月/日 ㊞	／	／	
えとかんじ				
かずとかんじ				
じどう車くらべ				

＜3．4年の音読カード＞

題名		
口の形や開き方、動かし方	○	
声の大きさ	×	
速さや間のとり方	○	
読みちがい	○	

○…よい　×……努力しよう

③ 全校基礎練習

朝会後の5分間を利用して、下記のような予定で全校基礎練習を実施した。

12月　練習のねらい、腹式呼吸(刑部、岩嵜)
1月　母音転換、舌の運動（金子、金塚）
2月　アイウエオの練習（八木沢、西村）
2月　口の体そうA　（酒井、小川）
3月　口の体そうB　（糸井、国井）

＜全校基礎練習実施計画＞

題材	口の体そうA 早口ことば	昭和56年2月9 酒井、小川
ねらい	1.発音や口形に注意して、五十音のいろいろな組み合わせを、正しく発音できるよう 2.一語一語を正確に歯切れよく言うように	
指導の順序	1.アイウエオの正しい口のあけ方を復習す イエアオウ　ウオアエイ 2.口の体そうをする。 ・ア行のテープを聞いて、反復する。 ・カ行のテープを聞いて、反復する。	

④ 学級・学年朗読会

学級朗読会を開き、学級2名の代表を選び学年ごとに発表会を開いた。読む文章は1年間に学習した国語教科書から選び1人2．3分の発表とした。

1.はじめのことば（ねらい）
2.基礎練習
3.発表
4.講評（学年の先生・校長）
5.おわりのことば

5. 実践授業

(1) 指導案　第1学年国語科指導案　昭和55年10月28日(火)　1年5組

1 題材名　はっきりしたこえで　「くじらぐも」　(光年　1年下)

2 目　標 (1) 場面ごとの様子を思い浮かべながら、はっきりした声で音読することができるようにする。

(2) 「――も」の使い方に注意して視写し、対比する表現の仕方を理解することができるようにする。

(3) 語句の意味を正しくとらえ、その使い方を理解できるようにする。

(4) 次の事項について指導する。

- 漢字の読み書き　年　子ども　空　右　男　女　天　村　町　三十
- かたかなの読み書き　ジャンプ　センチ　ジャングルジム　チャイム
- 語句　意味を明らかにし動作化や視覚、短作文作りによって定着させる。
  あっというまに　まっしろい　あいず　ごうれい　さそう　いきなり
  しんこきゅう　つないだまま　はりきる　あらわれる　うんどうじょう
- 複合語　くじらぐも　うでどけい　とびのる
- 文中での使い方　――たり ――たりして　――のことです
- 指示語　そのとき　ここへおいで　あのくじら
- 発音(鼻濁音)　くじらぐも　かぜが　およぐぞ　くじらが　五十センチぐらい
  (促音)　まっしろ　きっと　がっこう　やっと　もっと　あっと等
  (長音)　たいそう　うんどうじょう　ごうれい　ほうへ　さようなら
  おうえん　せんせい　もうかえろう　うでどけい　おうい

3 指導計画　総時数　13時間

過程	目　標	内　容	時間	備　考
見通しをたてる	○全文を読み通し読めない文字、わからないことばなどをはっきりさせる。 ○感想をもとに学習計画をたてる。	1.全文を自力で読む。 ・読めない文字やわからないことばをみつけしらべる。 2.第一次感想を書く。 ・おもしろいところ ・すきなところ	1 2	個別学習 個別学習
練習学習	○文字、語句、音読の練習をする。	7.すきな文の視写 8.短作文作りと音読練習　(本時) 9.テストをする	5	個別学習
発展学習	○学級文庫のすきな本を読みあらすじやおもしろかったことを発表する。	10.すきな本を読む	1	個別学習

4　本時の指導

(1)　題　目　　くじらぐも

(2)　目　標　◦くじらぐもが子どもたちと遊んだ楽しい様子がわかるように音読することができる。

◦みんなに聞こえるようにロを大きくあけて、正しい口形ではっきりと読むことができる。

(3)　展　開　　（右側の～～～は、時間、資料、準備、評価の観点を省略）

過程	具体的目標	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	◦本時の学習問題をとらえる。	1.本時の学習問題と学習方法を知る。	◦各自読み方を考えて読む。（めあてに沿って自分の読みをつくる。）
展開	◦ロを大きくあけて声を出すこと。	2.ロの体そうをする。	◦発声や口形に注意して、ロを大きくあけて声をだす練習をさせる。ステップ3と6
	◦はっきりと発音すること	3.「くじらぐも」の発音のむずかしい言葉の練習をする。	◦鼻濁音　およぐぞ　かぜが　くじらぐも ◦促音　あっ　いっぱい　のって ◦母音転換　あおい　あおい空 ◦長音　うみのほうへ村のほうへ町のほうへ
	◦くじらぐもが	4.くじらぐもが子どもたちと遊	◦くじらぐもが子どもたちと遊べて喜んだ様子

(2)　授業の記録

T1　きょうは子どもたちといっしょに遊べたくじらぐもの楽しさが聞いている人にわかるようにひとりひとり読み方を工夫する勉強をします。例えばここは大きい声で元気に読むとか、ここはゆっくり読むとか自分で読み方を考えて音読をします。

では、はじめに口を大きくあけて口の体そうをみんなでしましょう。先生のあとについて読んでくださいね。　（はじめにステップ3と6の母音転換練習）

「イアウ、イアウ」　はいっ

P「イアウ、イアウ」

T2 はい。口を大きくあけてはっきり発音できましたね。

つぎは　「イエアオウ、イエアオウ」　はいっ

(3)　反省と研究討議

◦授業のはじめの段階で口の体そうや発音練習をしたことは本時の目標に対して適当であった。そのため、児童は大きく口をあけはっきり音読することができた。

◦音読カードを使ったことによって、どの児童も観点に注意して自分なりの音読ができた。また友だちの音読を真剣に聞くことができた。

◦音読カードの観点は、1年生としては3つぐらいが適当だったようだ。

6. 研究のまとめと今後の課題

昭和５４年度の学び方をとり入れた学習過程を設定した研究のひき続きではあるが、音読・朗読という新しい研究分野であるので、核心にふれるような深いほりさげまではとうてい及ばなかった。

ただ、音読や朗読の重視がさけばれているが、これをどのように、指導の場へおろして具体化していったらよいかということは、おおよその見通しをつけることができた。つまり、音読や朗読を学習過程に確実に位置づけること、　それぞれの学習過程では、指導の観点を学年に応じて設定すること、音読・朗読の技能を高めるために基礎練習は有効であること、音読カードや朗読会により、児童の興味や関心が高まることなどが、わかってきた。

しかし、研究に着手して１年間である。本校のすべての児童の音読・朗読の能力が高まるまでには至っていない。実践の糸口が見えただけである。この研究の方針を５年間ぐらい継続してこそ、効果が目に見えて来るものと思われる。来年度は、基礎練習の学年の系統化をはかり、指導計画を作成し、年間指導計画の中に位置づけてみたいと考える。また、朗読会のような楽しい行事を学期毎に実施し、音読・朗読に対する興味・関心を更に高めたいと思う。どの教室からも、正しい発音で、快いひびきのある読み声が聞こえる学校にしてみたい。

国語部員　金塚聖子，酒井陽子，小川幸江，国井　洋，糸井千代子，金子伊吉，
八木沢久子，西村佳代子，岩崎廣子，刑部しげる（主任）